



はじめに

昔話と伝説の違いは何か？ 昔話はどこでも同じような話が伝わっているが、伝説は植物のように一つの土地に根を生やし、常に成長して行くものだ、とは民俗学者、柳田国男の指摘である。

中野に伝わる伝説の代表格は、中野長者伝説だ。中野という地名は武蔵野台地の中央に位置していたことに由来し、元来は現在の中野坂上から西新宿あたりの一帯を指す呼び名だった。そのため中野長者ゆかりの伝説も、そのエリアを中心に点在している。その中から、中野東図書館の近くにある成願寺と淀橋にまつわる伝説を紹介しよう。ちなみに「中野長者」こと鈴木九郎（1372頃―1440頃）にまつわる伝承は、6世紀の間に様々なエピソードが付け加えられ、互いに矛盾する多様なバリエーションがあるので、ここに記すのは、そのごく一例である。

2004)が鑑定した。彼は解剖学者でもあり、縄文時代から現代までの人骨を研究し、日本人の体格や容貌の変遷を明らかにするなど、骨格人類学の研究で知られている。鈴木博士の約10か月にわたる研究の結果、胎内の骨片は火葬された2体の人骨と、犬の骨と鑑定された。人骨は筋骨逞しい熟年の男性と、小柄で病弱らしい二十歳前の女性のものであった。室町時代の遺骨のようで、初めは骨壺に納めて土葬していたのを後年になって掘り出し、その一部を開山像の胎内に納めたらしかった。これは鈴木九郎と、娘の小笹と愛犬の遺骨で、墓の改葬時に掘り出されたのを供養するため、開山像へ納入したものと推定された。現在では九郎と小笹の遺骨は分骨の墓に納められ、一部は寺院内で保管されている。

淀橋伝説

姿見ずの橋 淀橋は成願寺の近く、青梅街道が神田川を横切る地点に架かっている。この橋は、かつて「姿見ずの橋」と呼ばれていた。それにはこんな言い伝えがある。

鈴木九郎は元来、善良な男だった

九郎、長者になる

鈴木九郎が妻と共に中野に住み着いたのは、室町時代初期の応永年間（1394―1428）のことだ。都では、足利義満が將軍職を息子へ譲って出家し、金閣寺を造営したり、日明貿易を始めたりしていた頃だ。

その時分の中野は武蔵国多摩郡中野郷といい、一面の草原だった。九郎は牛馬の売買をする馬喰と、未開地の開拓をしていたが、生活は楽ではなかった。ある日、やせ馬を馬市へ売りに行く道すがら、浅草観音に寄った。そして「馬が高く売れますように。もしお代の中に大観通宝が混ざっていたら、すべて奉納します」と祈った。当時、宋銭の大観通宝は貴重な通貨だった。馬は一貫文（現在の10〜15万円）で売れたが、改めて代金を見ると大観銭ばかりだった。これを納めてしまえば手元には何も残らない。しかし九郎は誓いを守って、全額を奉納した。

が、財を築くにつれて猜疑心が強くなった。財宝を家に置いておいては安心できないので、原野の人気のない所に運んでは埋めていた。その隠し場所が漏れるのを恐れ、財宝を運ばせた供の下男を帰りがけに橋の上で斬り殺しては、神田川へ投げ棄てていた。橋を渡る時には一緒にいた下男が、帰りには姿が見えなくなっていることから、地元の人はその橋を「姿見ずの橋」「面影橋」「暇乞いの橋」などと呼んでいた。

九郎の娘の小笹は父親の罪業を戒めようと、その橋から身を投げた。彼女の婚礼の夜、花嫁行列が屋敷を出て神田川にさしかかった時だった。以来、姿見ずの橋は不吉な橋とされ、避けられるようになった。とりわけ、婚礼の際に花嫁が通ると不縁になると言われ、避けられていた。

橋の改名と浄め祭 この橋にまつわる忌むしいイメージを払拭しようとした人物もいた。一人は徳川家光だ。江戸時代の中野村は幕府の御鷹場で、家光公もしばしば鷹狩りに訪れていた。その折に姿見ずの橋の名のいわれを聞き、縁起が悪いので「淀橋」と改めさせた。あたりの景色が京都の淀川に似ているからだったという。

帰宅すると、家には黄金が満ちあふれていた。観音様の靈験すみやかなことに感激した九郎夫妻は、熊野権現を祀る祠を建てた。これが現在、新宿中央公園の脇にある十二社熊野神社の起りとされている。九郎は紀州和歌山の熊野神社の神官、鈴木氏の末裔で、元は武士だったという。

彼は中野郷から神田川をはさんで隣接する豊島郡角筈村（現新宿区）にいたる一帯の土地も購入した。その地を開墾して年々豊かになり、神田川を見下ろす高台に屋敷を建て、中野長者と呼ばれるようになった。

中野長者の寺、成願寺

寺の縁起 九郎夫妻には小笹という美しい一人娘がいたが、18歳で病死した。夫婦は深く嘆いて出家し、九郎は正蓮、妻は妙珊と改名した。邸内に娘を供養する持仏堂も建て、寺号を正観寺とした。娘の戒名「真窓正観禅女」にちなんだ名である。

九郎が65〜69歳で亡くなる頃、屋敷は立派な寺院になっており、没後はそこに葬られた。同じ境内に熊野神社も祀られていたが、江戸初期の1628年に神社と寺院は分かれて、正観寺は現在の場所（中野区本町）に移転した。その際、寺号を成

しかし橋の名前を改めたぐらいでは、土地に根付いた迷信は消えなかった。文明開化の世になっても花嫁行列は淀橋を迂回し、他の橋や田んぼの中の小道を通って行った。

これでは不便なので、中野町の実業家、三代目浅田政吉（1878―1932）が橋の供養をした。本家の五代目浅田甚右衛門（1889―1939）の祝言で、婚礼行列が都心から車で来る道筋に淀橋があったこともあり、橋の浄め祭をした。1913（大正2）年11月21日のことだ。当日は淀橋のたもとに祭壇が設けられ、婚礼の当事者、橋の兩岸の中野町と淀橋町（現新宿区）の住民と町長、政財界の名士が参列するなか、神主が祝詞を上げ、来賓が演説をした。柳田国男も招かれて「伝説の尊重と迷信の打破」という演説をしている。

祝言はその翌日に行われたが、数日たつと「浅甚の嫁御は病気になるかって寝込んでしまった」という噂が拡まった。これには浅田一族の夫人たちが憤慨した。「嫁が達者でいることを世間に知らさねば」と姑の志津は嫁の道子（1896―1990）を連れて親戚宅を訪ね、親戚側からも本家を訪問した。この

願寺と改めた。「成願」は「所願成就」から来ている。九郎の墓も、江戸中期の享保年間（1716―1736）に成願寺へ改葬された。

腹籠りの開山像 寺院創建の際、建物や敷地の提供など財政面を負担した者を「開基」、初代住職のよいうな宗教面の創始者を「開山」という。成願寺の開基は鈴木九郎で、開山は川庵宗鼎（生年不明―1536または1546）だ。九郎が帰依していた曹洞宗の高僧、春屋宗能禅師（1382―1456）の曾孫弟子に当たる。

成願寺境内の開山堂（龍鳳閣）には、宗鼎和尚の開山像が安置されている。江戸時代の作で、70センチほどの坐像だ。この開山像は腹籠りだ、胎内には宗鼎和尚自身の遺骨が納められている、という言い伝えがあった。複数の木材を組み合わせて造る寄木造りの木像は、内部が空洞になっている。こうした仏像の胎内に舍利（仏陀や聖者の遺骨）や、小型の胎内仏、経典や願文などが納められていることを腹籠りという。

果たして1972年に開山像を修理解体した際、胎内から細かに砕けた骨の破片が出てきた。それを人類学者の鈴木尚（1912―デモンストレーションを2、3度繰り返すうちに、噂は立ち消えになった。道子は夫と添い遂げて7人の子に恵まれ、長男が家督を継いだ。

伝説のゆくえ 浄め祭の折、淀橋は木橋だったが、関東大震災翌年の1924（大正13）年には鉄筋コンクリートの橋に架け替えられた。現在の橋はそれから更に4代目で、2005年に架けられたものだ。中野区と新宿区の境にあり、林立するビルの間を通る橋は7車線、両脇に歩道もあり、車や人の往来が絶えない。淀橋の由来を記した看板が橋のたもとになれば、陰惨な伝説が生まれるほど寂しい場所だったなどは想像もつかないだろう。淀橋伝説は、記念碑や書物の中でだけ語られる昔の物語になったのだろうか？

いやいやどうして。花嫁にまつわる迷信は失せても、別種の噂が囁かれている。都市伝説のたぐいで本気になる大人はなかるうが、そうしたものでも侮ってはいけない。都市伝説や迷信、噂話も、何世代にもわたって語り継がれれば「伝説」や「口承文学」と呼ばれ、郷土史に組み込まれていくのだから。柳田国男も言うように、伝説は常に成長して行くものなのだ。 ※参考資料は最終頁に掲載